



発行所  
 社団法人 国民文化研究会  
 (九州←→東京←→全国)  
 東京都渋谷区東1-13-1-402  
 振替 00170-1-60507  
 電話 03-5468-6230  
 F A X 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部  
 毎月一回10日発行  
 購読料 年間2000円

### 第五十回「合宿教室」を迎へるに当って

日本人としての誇りを胸に各々が全力を尽さう

本会理事長 上村 和 男

昭和三十一年八月、祖国日本の永遠を祈念して、第一回の「合宿教室」が九州は鹿児島県霧島の地で開催された。日本の弱体化を狙った六年八月月の占領統治が終つて四年余り後のことであつた。当時、GHQの意図した「歴史との断絶」と、それによつて引き起された「国論の分裂」があちこちに表面化してゐた。例へば「親子間の見解・見方の相違」のために茶の間での会話が成り立たなくなるといふ悲劇が身近なところでも生れてゐたのである。それは単なる年齢の相違からくるものとは性質を異にしたものだった。

祖国の将来のため、占領統治がもたらしたかつした「人為的な」世代間の断層を解消しなければならぬ、そしてそのための学びの場を用意しな

ればならないとの信念のもと、小田村寅一郎前理事長を中心とする諸先輩が合宿教室をスタートさせたのだった。広く国民各層に「国民同胞感」を醸成し培ふことが国論の分裂を克服する道であり祖国永遠の方途であると信じたからである。

次は昭和四十年の本会「十周年の集ひ」の際の筈から抜き書きした「趣旨と念願」の一部である。

一、「合宿教室」によつて国の将来を担ふべき青年学生をして、祖国を愛し豊かな人生観を身につけ、真の学問を興えんとする心情を育み、さらに「一人から一人へ」の運動によつて青年学生の魂を喚び醒さむとする。

一、真の日本人たるには、日本のすぐれた古典の精神を味読し、そ

れを日本人の心の中に甦らせ、日本文化の伝統を将来に継承してゆく志操の涵養をはかる。

一、自らの国を自らの手で守ることは洋の東西を通じ、すべての国民の悲願である。日本を崩壊させようとする誤つた思想を打ち砕かない限り、日本を守ることはできない。日本民族の永遠なる生命を信じその生命を自らの心に感じ得る素直な情感を養ひ祖国を守る確固たる意志を振起し、世界の平和に盡す日本人を育成するにある。

右に掲げられた「念願」は依然として、現在においても最も肝要な事柄である。

昭和二十年代末から四十年代の中頃までは、占領政策に便乗したマルキシズムによる亡国の危機がツねに存在してゐた。ジャーナリズムの大勢は、中ソを理想視する言説を振りまいて、マルキシズムに加勢してゐた。そのため左翼学生運動の鼻息は荒かつた。ところが社会主義イデオロギーによる支配の実態が徐々に明らかになり冷戦が終ると、国内でも社共勢力が年々退潮して国情は一見、落ち着いたかに見える。

しかし、祖国の文化・伝統・歴史への自覚と、それらを学ぶことによつ

て揺るぎない祖国への信頼を取り戻したかと言へば、いまだ道遠しの状況が続いてゐる。人類数千年の歩みの中で人間の社会活動の中心は国家であるにも拘はらず、わが国の現状はまことに寒心に耐へない。

近年、やうやく浮上してきた「国を愛する心」を教育の場に！とする声に対しても、国を憶ひ愛することは戦争につながり平和を乱すなどと「進歩的」学者・文化人は主張して止まない。朝日などのマス・メディアもその声に大きく紙面をさく。彼らはまた国外の勢力を呼び込んでまで教科書の自主編纂・採択に干渉しようとする。「国家は悪である」、それも自国のみを悪しざまに言ふ病的な歪んだ考へなのだ。その国家不信の根にあるものは、二度と日本が米国の前に立ちはだかることのないやうに、軽侮の念で祖国の歴史を見ることを峻した占領政策である。占領は半世紀以上も前に終つたといふなかれ！

今こそ、祖国の文化・伝統と歴史に学ぶことに一人一人が心を向け、日本人としての誇りをもつて、仕事に勉学に家事に子育てに、あらゆる面に全力を傾けるべきである。教育基本法の見直しも憲法の改正も、それを抜きにしてはあり得ないのである。